



大阪旭区太子橋あたり

大阪市立太子橋小学校が守口市域内にある

地下鉄、太子橋今市駅の改札を出たところに案内地図がある。付近を正確に示したものだが、その中で気になることがあった。大阪市立太子橋小学校がスッポリと守口市域内にあることだ。また市境が東から西へそして小学校の東北角でほぼ直角に南下している。

旧国名では、守口は河内の国、大阪市は摂津の国だから市境は昔の国境でもある。何故こんな街の真ん中に国境線が通っているのだろうか。また私達太子橋地区の氏神様に、豊里大橋の向こう側の豊里大宮であることも不思議でならなかった。

淀川の大改修 細長い太子橋の地形

淀川は八幡で桂川、宇治川、木津川の三河川が合流して大阪湾に注ぐ大河川である。この川の恵みで天下の台所といわれた大阪が育てられた。

農業に飲料水に、そして船運にまさに母なる大川である。今でも各地で水飢饉が叫ばれているときでも大阪は節水程度で済まされるのはこの川のおかげだ。しかし川は恵みだけではなく、時には大洪水の災難をもたらす。有史以来の洪水記録では130回以上、平均十年に一回は被害を受けていることになる。このため古くは「日本書紀」の仁徳天皇十一年冬の条に「以って茨田堤を築く」とあるように治水は大きな課題であった。明治十八年六月に、折から梅雨の長雨で大洪水が発生した。枚方付近で堤防が決壊し、下流は太古そのままに河内湖の様相を程することになった。

このことが契機となって、淀川の大改修が行われることになった。

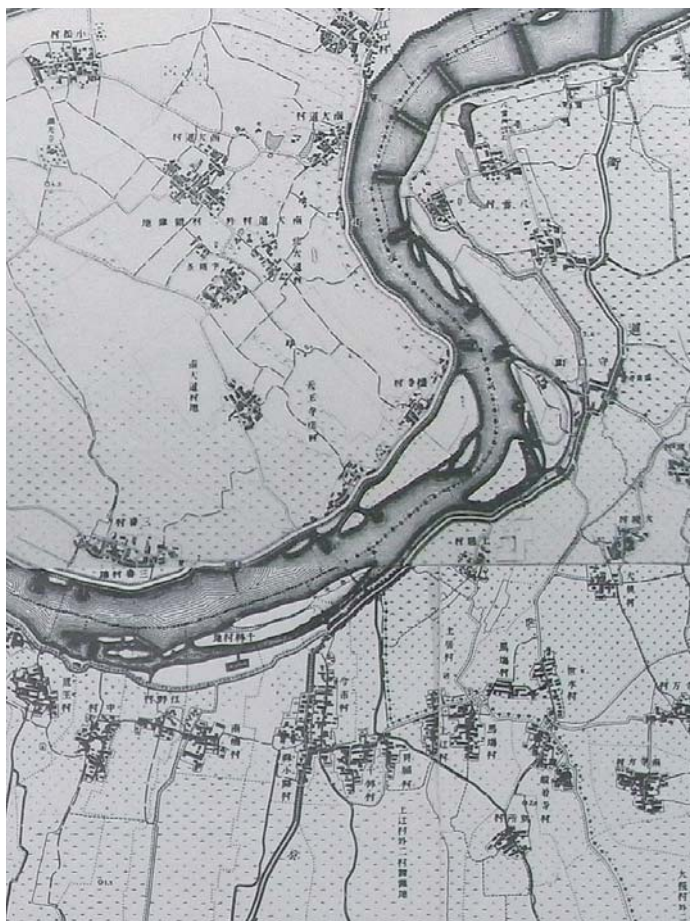
大改修前、明治十八年の陸地測量部が作成した地図を見よう（図①）。淀川は守口付近で大きく湾曲している。そして毛馬付近を本流と中津川に分かれて大阪湾に向かっていく。明治二十九年から始められた河川工事では、流路の整備と毛馬からの放水路を作ることが行われた。外国人の技師に指導されながらの大工事であった。

このとき守口から赤川付近までの流路付替はこの付近の住民にとって大事件であった。

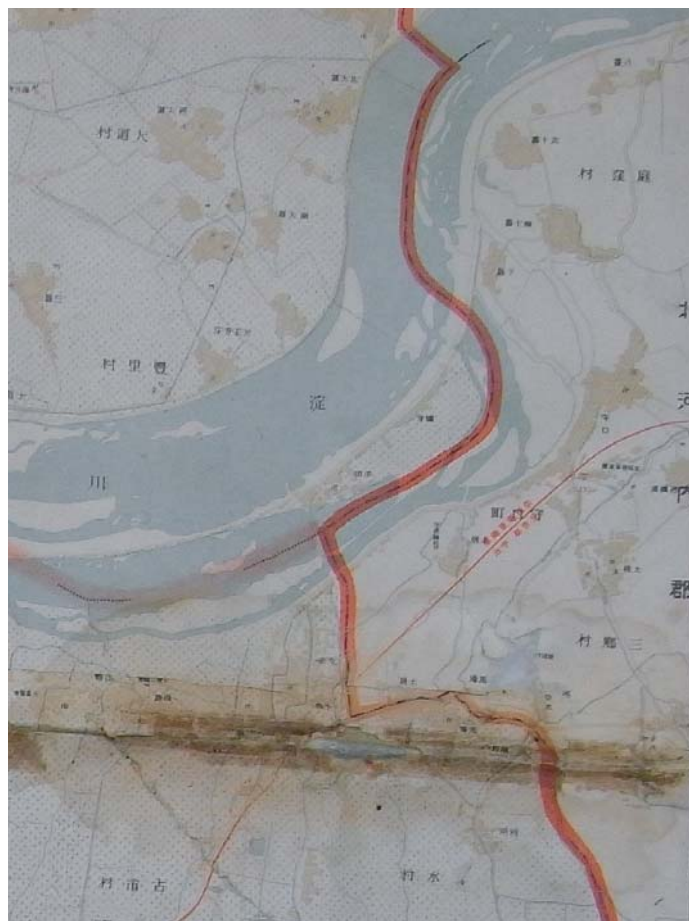
大正十四年の地図（図②）を見るとそのことがよく判る。この頃は工事完了後間もない時期であるので旧河川が地図上によく残っている。もともと淀川の右岸にあった、豊里村、平田地区が左岸に取り残され、川全体が北へ大きく移動したことが読みとれる。

■ 淀川河川敷に設置された
茨田の堤の碑





■ 図① 明治20年測量 - 改修前の淀川 -
(資料: 大阪市史編纂所)



■ 図② 大正14年測量 - 改修後の淀川 -
(資料: 大阪市史編纂所)



■ 図③ 最近の地形図

図中「—」が国境標示である。
川は北へ動いたけれど境界はそのまま残されたのである。
最近の地図(図③)を見ると大阪旭区太子橋が細長く
守口市域に入り込んでいるのはこのためである。
百年前、小学校の敷地はまさに川の真中にあったこと
になる。近くの私の家もそのとおりである。
したがって改修後は飛地となった地区の住民は平太の
渡しを利用して通行した。
氏神様も豊里大宮へお参りするのが当然のことだった。

葦の間に通っている道を河岸まであるき、そこから渡
し船に乗ったものである。平底の大きな船は自転車も
乗せることが出来た。多分市の職員であったのだろう
船頭さんは河岸に沿って上流へ漕ぎ上りそして流れを
横断する。春には野草摘みの人達も対岸を目指したも
のである。

(※地図の変更に伴い、一部内容を変更)